

令和 6 年 2 月 22 日

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究 A	
校 園 コード（代表者校 園 の市費コード）	
561155	
選定番号	116

代表者	校 園 名：	大阪市立本田小学校
	校 園 長 名：	今村 友美
	電 話：	06-6581-1531
申請者	事務職員名：	喜連 尋滋
	校 園 名：	大阪市立本田小学校
	職 名 ・ 名 前：	教諭 池上 智希
	電 話：	06-6581-1531

令和 5 年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和 5 年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	継続研究（2 年目）
2	研究テーマ	対話が深まる学びを創出する授業・教材の開発			
3	研究目的	<p>本校では、これまで逆向き設計論、パフォーマンス課題、一枚ポートフォリオ等の研究を実践してきた。しかし、全教員で本校の実態をふりかえったところ、「自分の考えをもつこと」「自分の考えを伝えること」「他者の考えや思いを受け止めること」といった点を苦手とする児童がいる実態が明らかとなった。これらの課題から、「互いを認め合う本田っ子」をめざす子ども像とし、対話的な学びに焦点を当てて、試行錯誤の必要性から対話を創出する授業・切実感から対話の必然性を創出する教材を開発する研究を推し進めていく。</p> <p>①対話的な学びを実現することで、児童が問題解決に向けて多角的に思考できるようにする ②教員の授業力向上 知識・技能を教え込む授業から学びの深まりを創出する授業へ ③教材との対話を通して、児童に「気づき」をもたらす教材の開発 ④地域の方々、専門家といった他者との対話を通して、児童の質問力を育む授業の開発 ⑤実践事例の作成による次年度以降の研究の土台づくり</p>			
		いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSコシッパ 9.5ポイント）			

4	取り組んだ 研究内容	<p>①「対話が深まる学び」の授業実践 ⑥教員の学びを広げ、深めるための講演会の実施 授業で「対話」をどのように位置づけるかを検討しながら、全員が研究授業を行った。その中でも、講師を招聘して実施したものについて記す。 6月14日 5年 総合的な学習の時間 講師：大阪教育大学 木原俊行 教授 9月27日 2年 生活科 講師：関西福祉化学大学 馬野範雄 教授 11月8日 4年 社会科 講師：滋賀県立大学 本宮裕示郎 准教授 11月22日 1年 生活科 講師：大阪教育大学 錢本三千広 特任教授 1月24日 6年 道徳 講師：兵庫教育大学 徳島 祐彌 講師 2月7日 3年 理科 講師：大阪教育大学 木原俊行 教授 研究授業後の協議会では、それぞれの講師から教科の特質に応じた対話の在り方についてご教授いただいた。また校内研修の一環として、学期に一回「対話」についての実践交流会を実施した。3回の実践交流会を通して、目指す子どもの姿や授業像などを全教員と共有した。</p> <p>②「対話が深まる学び」に着目した公開授業研究会の実施 10月20日に公開授業研究会を実施した。当日は6本の授業（3年外国語・4年音楽・5年社会・5年総合・6年道徳）を公開した。授業後はそれぞれの教室で協議会を行った。前半は本校教員をパネラーとしてたて、授業の振り返りを行い、後半は参会者の質疑に応答するという形をとった。多くの教員から授業に対する意見を聞くことができた。また講師として京都大学石井英真准教授を招聘し、研究会の後半には講演会を実施した。研究テーマである「対話」をベースとして、今求められる教育の在り方について、参会者と共に学ぶことができた。</p> <p>③「対話が深まる学び」につながる体験活動の実施 多くの学年で外部講師を招聘して実践を行った。5年生では総合的な学習の時間に「防災」の学習を行い、区役所防災担当や東日本大震災語り部などと連携を行った。また1年生では幼少連携の機会を増やし、紙芝居を作成して学校を紹介するといった実践を行った。外部リソースの活用により、より真正な場で対話的に学ぶ機会を設定した。</p> <p>④ 教員の授業力向上のために、先進的研究校及び研修会への派遣 東京学芸大附属小金井小学校、福岡教育大学附属小倉小学校、筑波大学附属小学校他 学んだことを校内で伝達研修を行うことで、「対話」に関する知見を深める機会とした。</p> <p>⑤対話を促進させる学習材・協働学習支援ツールの活用 発表用ホワイトボードや円形型ホワイトボード、大阪市が導入している協働学習支援ツール（Teams、SKYMENU Cloud）等を活用した授業実践を行った。</p> <p>⑦カリキュラム・マネジメントの充実に向けた授業実践 総合的な学習の時間や生活科を中心に、国語科や社会科との関連を図る実践に取り組んだ。その実践は上述した講師に参観していただき、指導講評をいただいた。</p>			
5	研究発表等の 日程・ 場所・ 参加者数	日程	令和 5 年 10 月 20 日	参加者数	約 83 名
		場所	大阪市立本田小学校		
		備考	6本の授業を公開（3年外国語・4年音楽・5年社会・5年総合・6年道徳） 講師：京都大学 石井英真准教授		

大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。

【見込まれる成果１】

- ☒ 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上
☐ 教員の資質や指導力の向上

対話が深まる学びの実践を通して「確かな自分の考えをもつ力」「自分の考えを明確に伝える力」「他者の考えや思いを受けとめる力」を育成する。

《検証方法》

本研究についての児童アンケートを実施し、「授業中に自分の考えをもつことができますか」「自分の考えは友だちに伝わっていると思いますか」の項目について、肯定的な回答を85%以上にする。

〔検証結果と考察〕

1月に実施した校内調査では、「授業中に自分の考えをもつことができますか？」に対する肯定的な回答93%、「自分の考えや意見を話したり、書いたりして表現することはできますか？」（校内で質問項目を検討した後、左記のように変更。）に対する肯定的な回答88%であった。本年度も昨年度と同様に継続して、児童の対話の充実を意識しながら授業実践に取り組んだ成果と考える。また、考えの表現の仕方として、ノートやタブレット端末など個に応じたツールを活用するように促したことも、多くの児童の自信につながったと考える。さらに研究協議会では児童の学びの姿に着目した協議を行うことで、目指す子ども増が教員間で共有できたことが成果につながったと考える。

【見込まれる成果２】

- ☒ 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上
☐ 教員の資質や指導力の向上

地域やゲストティーチャーと連携した活動や、人・自然・文化（もの）との関わりを充実させた豊かな体験活動を通して、児童同士の対話を促進し学びが深まるようにする。

《検証方法》

本研究の実践前後で、児童アンケートを実施し、「見学したり、実物を体験したりする活動は好きですか」「地域の方々や専門家の話を聞いたり、質問したりする学習は、自分の成長につながっていると思いますか」の項目で、5ポイント以上上昇させる。

〔検証結果と考察〕

4月の校内調査では、「体験や見学、専門家から話を聞く活動を通して、芸術・スポーツ・文化・伝統などを学ぶことができますか。（校内で質問項目を検討した後、左記のように変更）」の質問に対して、肯定的な回答が86%だったのに対して、1月の校内調査では95%に向上していた。戦争の語り部や東日本大震災の語り部などの様々なゲストティーチャーを招聘してお話をいただいたり、子どもの学びを支えるために区役所防災担当と毎月関わったり、幼少連携の回数を増やしたりすることで、児童が自身の生活と結びつけながら学習に取り組む機会が増え、成果につながったと考える。

【見込まれる成果３】

- ☐ 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上
☒ 教員の資質や指導力の向上

研究授業・校内研修等で「対話」に対する知見を深めたり、教科横断等の視点に立った授業実践に取り組んだりすることを通して、「対話が深まる学び」について校内で検討し、それを基に実践を深めるといったサイクルを回すことで、教員の資質や指導力を向上を目指す。

《検証方法》

教員アンケートの項目「今年度の校内研究は自分の授業力向上につながった」「今年度の研究は、自分の教育観の見方・考え方を広げるものであったか」で肯定的割合を80%以上にし、「教科等横断的な授業実践を行うことで、自身にどのような力が身に付いたのか」に対しての記述回答及び口頭による回答を分析し、資質・能力の向上を明らかにする。

〔検証結果と考察〕

教員アンケートにおいて、「今年度の校内研究は自分の授業力向上につながった。」「今年度の校内研究は自分の教育観の見方考え方を広げるものであったか。」という項目に対してどちらも肯定的な回答が100%であった。また「教科等横断的な授業実践を行うことで、自身にどのような力が付いたのか」という項目について以下のような回答があった。
・協働して考える力が必要であると分かった。
・子どもたちの意見を再構築していく時に、授業のどのような場面で、話し合いや意見交流をするのが効果的なのかを考えることができた。
・教科等横断的な視点で授業を見ると、教科の見方・考え方とどの教科でも活用できる汎用的な力との大きく二つの力が必要であることが分かった。その両方をバランスよく育成していくことが大切である。
これらのことから、校内研究が授業力向上につながったという実感をもっており、その具体的な授業イメージをもつことができているということが分かった。

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>本研究が、大阪市各校の研究の一助となる。</p> <p>＜検証方法＞</p> <p>公開時のアンケートで「本校の研究は、参考になったか」の項目で肯定的な割合を80%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>10月20日に行った公開授業研究会でのアンケート調査の結果、「研究発表会や公開授業で得た知識や気づきは、今後の実践に活かすことができそうですか。」の項目において、肯定的な回答は96%であった。自由記述欄においても「自分の学級に生かしたい」「授業作りの参考になった」という記述が見られた。その要因として、教科の違う6本の授業を公開し、その授業ごとに参加者と意見交流できる研究協議会を設定したことがあげられる。また講師として招聘した石井英真准教授の講演会も好評であったこともその一つだろうと考える。次年度も石井英真准教授を招聘し、今年度と同様の公開授業研究会を行う予定である。本校の研究を大阪市各校の研究の一助となるよう広めるとともに、本校の研究がさらに深まるよう研鑽を積みたい。</p>
		<p>【研究全体を通した成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>＜成果＞授業構想における変化が多く見られた。</p> <p>1. 単元全体を見通して、授業デザインをする教諭の増加。</p> <p>2. 対話する場の設定を工夫する教諭の増加。</p> <p>3. ICT機器の効果的な活用を試行錯誤する教諭の増加。</p> <p>4. 児童の対話する内容に、これまで以上に注目するようになった教諭は、児童への言葉かけに変化があった。</p> <p>5. 教材の開発（裁判員制度、水遊びなど）が行われ、それらの実践をTeamsで共有することができた。</p> <p>6. 「対話」をキーワードに、授業力向上に向けての校内研修の増加。</p> <p>これらのことから、自分の考えを表現できる児童や根拠を比較できる児童が増加した。</p> <p>＜課題＞</p> <p>1. 教師のファシリテート力の未熟さ</p> <p>2. 対話に応じた構造的な板書づくり</p> <p>3. 対話に向かう児童の学習状況をいかに把握するか</p> <p>といった課題が見られた。今後は、今年度と同様に継続的な授業力向上の場づくりに取り組み、児童の学習状況を把握するための方法を模索していきたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>今年度は昨年度課題として挙がっていた「教師のファシリテート力の未熟さ」に焦点を当て、新たにカリキュラムマネジメントの視点を加えて研究を進めた。そこで総合的な学習の時間や生活科での研究授業を3本取り入れ、教師主導で授業を展開するのではなく、児童の願いや思いに寄り添いながら単元や授業を進める実践を行った。教師がファシリテーターとして児童の「対話」をサポートする授業をデザインにすることで、児童の「対話」を深めることに繋がったと考える。研究協議会では「児童の学びの姿」を中心に据えて協議することで、その姿から「対話が深まる姿」に焦点化して話し合いを行うことができ、教員の意識の変容に影響を与えることができただろう。また外部リソースを活用した体験的な学習にも取り組んだ。「対話」の対象が仲間や教材だけでなく、外部講師や地域人材へと広がったことも児童にとって大きな学びになったであろう。さらに単元の中で他教科との関連を意識したり、招聘した講師からカリキュラムマネジメントの視点を教わったりすることでその必要性に気付く教員が増えたことも大きな成果だと言えるだろう。一方で「対話」を通して児童それぞれが学びを深めるためには、個々の学びが個性化されることが必要であると考える。児童それぞれが学びに対して願いや思いを醸成させる時間や学習環境等を工夫する必要があるが、今年度はそのような授業・単元デザインができなかったことは課題として挙げられる。そこで次年度は「学習の個性化」に焦点を当て、児童一人一人の学びを大切にする授業デザインを研究していきたい。</p> <p>公開授業研究会では「対話が深まる学び」というテーマで教科の違う6本の授業を行った。全教員で授業づくりから関わることを通して、教材研究や教科の見方・考え方を意識することの重要性を教員間で改めて共通理解することができた。次年度も石井准教授を招聘して同様の研究会を開催する予定である。教員間も授業づくりを通して「対話」し、授業改善に努めていきたい。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>

<p>《代表校園長の総評》</p>	
<p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p>	<p>本研究は、「対話」を中心に協働的な学びへと展開するものであった。教員自身が研究教科を決め、教材を解釈し、児童へのアプローチの仕方を考え、実践を重ねることができた。「対話」を主軸として授業を構築していくことにより、児童が学習内容に対して問題意識をもち、学びを深めることができたといえる。また「対話」は、仲間とだけではなく、教員との対話、教材との対話、外部講師との対話、地域の方々との対話と3次元的に広げることができ、「対話」することの意味を考える研究となった。教員にとっては、協働的な学びが「対話」によって深まるという実感ができ、より「対話」を大切にした授業を考えるようになっていく。多くの研修会、講師による指導から教員自身が「対話」を重ねることの重要性を学ぶ研究ともなった。</p>
<p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p>	
<p>昨年度の成果と課題を踏まえ、「対話」を主軸としてより深い学びが展開できる授業デザインを継続するとともに、教科横断的な視点でカリキュラムマネジメントしていくことを研究の視点に加え、研究を進めることができた。</p> <p>今年度の成果として、昨年度は授業をデザインする際、「児童へどのようにアプローチしていくか」ということを検討していたが、今年度は「どうすれば児童の思いや願いに寄り添うことができるか」という視点で検討するようになり、結果、児童から「問い」が生まれ、「課題解決」への意欲が高まり、「対話」が深まり、深い学びにつながったと考える。また、教科間のつながりを考え単元や授業をデザインすることでも児童の学びの深まりを実感できた。</p> <p>今年度の研究発表会には、昨年度を上回る多くの参加者があり、本研究に対して肯定的な意見を多数いただくことができた。京都大学石井准教授の講演は、児童が学校に集う意味を再認識させてもらえる内容であり、参加者が「明日からまた、目の前の児童とともにがんばりたい」と強く思うものであった。継続して研究を進めていきたいと希望する。</p>	
<p>3. 継続研究（3年目）</p>	